World Health Organization

WHO CENTRE FOR HEALTH DEVELOPMENT

主催: WHO 神戸センター ・ WHO 神戸センター協力委員会
協力：国際義肢装具協会(ISPO) 日本支部・兵庫県立リハビリテーションセンター

WKC フォーラム: 高齢者のためのイノベーション
～ 加齢に伴う虚弱や障害に対処するために ～

2014 年 6 月 24 日

プ ロ グ ラ ム

（敬称略）

14:00～14:10	**開会の辞**	WHO 神戸センター
14:10～15:20	**講 演**	
	「高齢者のためのイノベーティブな福祉機器 ～加齢による虚弱や障害に対処するために: 概要」	世界保健機関 (WHO) 本部 暴力・傷害の防止と障害部局 障害とリハビリテーション テクニカルオフィサー チャパル・カスナビス
	「高齢下肢切断者の義足歩行」	国際義肢装具協会 (ISPO) 日本支部 会長 兵庫県社会福祉事業団 福祉のまちづくり研究所　所長 兵庫県立リハビリテーション中央病院 ロボットリハビリテーションセンター長 陳 隆明
	「日本の義肢装具教育の沿革： 地域社会に根ざしたリハビリテーション実践の経験から」	兵庫県立リハビリテーション中央病院 名誉院長 澤村 誠志
	「日本の義肢装具教育：福祉用具学導入とその背景」	熊本総合医療リハビリテーション学院 義肢装具学科　学科長 小峯 敏文
15:20～15:55	**討 議** （オープン・ディスカッション）	モデレーター： 陳 隆明
15:55～16:00	**閉会の辞**	WHO 神戸センター

開催背景：

2020 年までに、世界の人口は 77 億人に達すると予測されています。このうち、65 歳以上の人口は 10 億人に上る一方で、5 歳未満の子供の人口は 6 億 5 千万人にとどまる見込みです。すなわち、世界の人口統計は、いま、確実かつ急速な高齢化というこれまでにない変化を示しています。今回のフォーラムでは、WHO の専門官が日本の専門家 3 名とともに、障害・福祉機器・地域社会に根ざしたリハビリテーション・義肢装具教育など、それぞれの分野から実証に基づいた研究成果や現状について発表します。また、高齢者が現在抱えている、あるいは、これから直面する可能性のある虚弱や障害といった課題に向けていかに取り組むべきか、イノベーティブな福祉機器を用いての対処策を報告、提案します。

講 演 者 略 歴

（登壇順・敬称略）

チャパル・カスナビス

世界保健機関 (WHO) 本部
暴力・傷害の防止と障害部局
障害とリハビリテーション テクニカルオフィサー

1979 年、インド・ムンバイの All India Institute of Physical Medicine & Rehabilitation の義肢装具エンジニアリング学部を卒業。リハビリテーション科学修士（英国・ストラックライド大学）。14 年間のインド社会福祉省勤務の後 1994 年の退職を機に NGO モビリティ・インディア (Mobility India) を設立、9 年間にわたりその活動を主導。その後、WHO に移り現職、地域社会に根ざしたリハビリテーション(Community-based Rehabilitation – CBR) と福祉機器の普及に取り組んでいる。WHO の車椅子ガイドライン、車椅子トレーニングパッケージなどの作成にも貢献。WHO をはじめ、国際労働機関 (ILO) や国際連合教育科学文化機関 (UNESCO) などが共同で出版準備にあたった CBR ガイドラインにおいては、百を超える低・中所得国で実践されている 地域に根ざした包括的な開発 (Community-based Inclusive Development - CBID) という新たなコンセプトについても紹介、編集責任者としてガイドライン策定に尽力した。

『人は誰しも、加齢に伴う機能低下を避けて通ることはできません。しかし、老化がもたらす虚弱や障害、そして孤独感といった課題は、歩行器や車椅子、人工装具、補聴器や低視力者用補助具、また、日常生活動作を補助する機器やモバイルアプリケーションなどの福祉機器(AT)の活用により、予防、抑制、さらには矯正することが可能です。これまで障害を持つ人達のために開発・改良されてきた AT は、高齢化社会を迎えた今、加齢に伴う虚弱や障害といった高齢者のためのニーズに応えることが期待されています。』

陳　隆明　（ちん たかあき）

兵庫県社会福祉事業団 福祉のまちづくり研究所 所長
兵庫県立リハビリテーション中央病院
ロボットリハビリテーションセンター長

1986 年徳島大学医学部卒。1992 年医学博士（神戸大学）。同年より兵庫県立総合リハビリテーションセンターに勤務、2006 年から同中央病院整形外科部長兼リハビリテーション科部長、2011 年からはロボットリハビリテーションセンター長も務める。多くの障害者に大きな恩恵をもたらすロボットテクノロジーのリハビリテーション分野への応用、特に筋電義手の普及に尽力している。2014 年 4 月からは兵庫県立福祉のまちづくり研究所長として、「安全・安心まちづくり、すまいづくり支援等の研究」、「福祉用具やリハビリテーション支援技術等の研究開発」を主導している。日本義肢装具学会評議員、日本リハビリテーション学会代議員他、関係学会の役職を歴任。四肢切断と脊髄損傷のリハビリテーション、義肢装具などの専門分野についての論文・著書多数。

『近年、超高齢化を背景として、動脈硬化や糖尿病といった疾患が下肢切断原因の主なものとなっています。その結果として、下肢切断者に占める高齢者の割合が大きくなっています。義足で歩くことは、成壮年の切断者にとっては大きな困難ではありません。しかし、義足歩行を獲得するためのリハビリ過程は高齢者にとっては大変困難な過程であり、リハビリの成功率も低いのが現実です。専門性の高いスタッフによるチームアプローチが成功のための重要なカギと言えます。高齢者の義足歩行について紹介したいと思います。』

澤村 誠志（さわむら せいし）
兵庫県立リハビリテーション中央病院
名誉院長

1955 年神戸医大卒、整形外科入局。その後、米国 UCLA 義肢教育プロジェクトで義肢製作研修を受ける。1969 年兵庫県立総合リハビリテーションセンター開設後、副院長、院長、所長職を経て、2001 年より顧問、名誉院長として現在に至る。兵庫県リハビリテーション協議会ではその設立 (1973 年) に尽力、現在も会長職を務める。日本リハビリテーション医学会会長 (1992 年)、国際義肢装具協会 (ISPO)会長 (1995～1998)、神戸医療福祉専門学校三田校校長(2003 年～現在) などを歴任。専門領域である整形外科、義肢装具、地域リハビリテーション、障害者・高齢者の医療と福祉などに関する著書、講演多数。身体が不自由であっても、住み慣れた地域の中で尊厳をもって心豊かな生活を送ることが可能な環境づくりを目指す「地域リハビリテーション」をライフワークとしている。

『父が下腿義足者であり、尚かつ義肢製作者であったことから義足の研究を目指し整形外科の道を選びました。1955 年頃の日本には、義肢装具に関する教育は皆無であり、また、関連職種間の連携の場もありませんでした。そこで、1968 年日本義肢装具研究同好会が神戸で発足、これが現在の日本義肢装具学会につながっています。1990 年に立ち上げた日本リハビリテーション病院施設協会では、障害のある人々や高齢者およびその家族の支援を目指し、地域に根ざしたリハビリテーションを実践しています。』

小峯 敏文（こみね としふみ）
熊本総合医療リハビリテーション学院
義肢装具学科　学科長

1982 年国立久留米工業高等専門学校卒。1985 年国立障害者リハビリテーション学院義肢装具学科卒。1994 年佛教大学通信教育部社会福祉学科卒。1985 年～1988 年には米国・Leimkuehler Inc. にて義肢適合士研修、1988 年米国義肢適合士取得、1988 年義肢装具士免許取得。義肢装具士教育においては、国立障害者リハビリテーション学院を経て、1994 年より熊本総合医療リハビリテーション学院、1996 年より現職。社会的活動として 2001 年～2007 年 日本義肢装具教育者連絡協議会会長、2004 年～2007 年 義肢装具国家試験作成委員、2004 年　義肢装具士法改正検討委員、その他関連学会の活動など。教育の傍らで、回復期リハビリテーション病院や義肢を中心とした臨床活動を行ってきた。単に義肢装具のみを対象とする専門職ではなく、人と機械の適合という広い視点からの教育を目指している。

『義肢装具士は関係医療職種に含まれますが、非常にユニークな職種です。疾患や障害を抱えている方々を対象として、義足・義手・装具といった用具を製作し、適切に身体へ適合することを専門としています。高齢化が進む日本では介護保険制度等の方策が取られています。車いすや杖といった福祉用具も多様なものがより広く用いられるようになってきましたが、適切に使用者に適合しているでしょうか。義肢装具士養成においては、義肢装具以外の身体適合を必要とする福祉用具にも焦点を当てた講座を開設しています。講演では幾つかの臨床例を紹介しながら、直面している課題を提起します。』